目次

ウナゾカ：Free Bird/Lynyrd Skynyrd 3
アドアイヤグガ：Sunshine Of Your Love/Cream 17
キンガくイロー：20th Century Boy/T.Rex 27
トランセンド：Touch and Go/Ed Sheeran 45
ヒンゾラクル：Lovely Day/Bill Withers 57
ゾスターンーンビー：I Bet You Look Good On The Dancefloor/Arctic Monkeys 69
あとがき：Waterfall/The Stone Roses 86

カネヤカ：Free Bird/Lynyrd Skynyrd

イグニッションボタンを押すと、一〇・二五インチのディスプレイが起動する。

「ＭＡＫＥ　ＬＩＦＥ　Ａ　ＲＩＤＥ」――バイクのある人生を。

和訳した途端に野暮ったくなるメッセージが画面外に消え、スピードメーター、タコメーター、ギアインジケーターが表示されたのを確認して、セルスイッチを押す。キュキュッという甲高い音が二発鳴ったのに続いて、懐の深さを感じさせるエンジンパルス音が響いた。

軽くアクセルを捻ると、一二五四ｃｃの水・空冷水平対向二気筒（ボクサー）エンジンが噛みつくように高く唸る。それに合わせて、車体がやや左に振れた。このエンジンを搭載したバイクの特徴だ。

俺はサイドミラーで後方を確認し、パーキングエリアの駐輪場から出ようとした。――ところへ、一台の大型バイクがするりと滑り込んできた。

まず視界に入ったのは極端に前に突き出た前輪。それから鋭角に伸びるフロントフォーク、丸目のヘッドライト、八の字に開いたハンドルをサイドミラーとウインカーが上下から挟んでいる。焦茶色に塗られたピーナッ型のタンクの下からは響く空冷Ｖツイン独特のエンジン音は、ドコドコと腹の底から突き上げてくるようで、停車時ですらその狂暴さをまるで隠せていない。

ハーレーダビッドソンの大型バイク。ブレイクアウトとかいう名前だったような気がする。

誰が乗ってるんだろうな、と乗り手を見た時、俺は目を疑った。長い尻尾がシートの上に丸く収まっている。そしてヘルメットの後ろからは、細くまとめた後ろ髪が長く伸び、それは毛先に近づくほど白くなっていく。

ウマ娘だ――しかも、この髪は、もしや。

彼女がエンジンを止め、ヘルメットを脱いだ時、俺は思わず愛車のエンジンを切った。その推測が確信に変わったのだ。

外にハネた茶髪、右目を隠す長い前髪、凛とした鼈甲色の瞳、そして大きな耳。彼女はブンブンと顔を二三度振った後、その様子をじっと見ていた俺の視線に気づいたらしい。俺たちはたっぷり五秒ほど見つめ合っていた。

彼女は服装こそ黒い革のジャケットにジーンズ、ブーツと、夏が近いにも関わらずいかにもハーレー乗りな服装をしていた。しかし、その顔つきだけは多少大人びてはいるものの、殆ど変わっていない。むしろ、あの頃の顔が鮮明に脳裏に焼き付いているためか、俺はどうしても黒ずくめの全身と彼女の顔がミスマッチに思えて、違和感を拭えなかった。

「んぁ？　カッケーだろ、俺のハーレー。オメーのその……デッケーのもイカしてるけどな！」

ウオッカは、俺がどうやらバイクに見惚れていたと勘違いしていたようだ。

「君もそう思うか？　でも、これに乗ってるのが誰か分かったら、さらに驚くさ」

俺は苦笑しながらそう言って、真っ白なフルフェイスのヘルメットを脱いだ。
「あっ……トレーナー!?」
「正しくは元・トレーナーだ。学園卒業から五年だっけ？　久しぶりだな、ウオッカ」
「もうそんなに経つんだっけなあ……。へへっ、懐かしいぜ」
そう言って俺たちは、かつてそうしていたように、拳を付き合わせた。

福岡県北九州市門司区、めかりパーキングエリア。福岡を地元とする俺ですら、「和布刈（めかり）」の三文字は初見じゃ読めなかったが、ここはある特徴によってライダー御用達の休憩スポットとなっている。
それは、本州と九州の間に広がる関門海峡と、その上に架かる関門橋を一望に収められる、というものだ。低い山林の集落から飛び出してくる、高さ一四〇メートル、長さ一キロを超える吊橋は雄大そのもので、晴れた日には抜けるような青空と、風にざわめく山林、静かな海のコントラストは長旅につかれたライダーの疲労を吸い取ってくれるようでもある。

それだけではない。海を片目に海鮮丼やラーメン、ステーキ重といったボリューム満点のフードメニューで腹を満たせば、ライダーのガソリンも一瞬で満タンになる。

しかしながら、そんな西国のフードコートで、俺はブラックコーヒーを、ウオッカはカフェオレ（最近コーヒーにチャレンジしているらしい）を前に、再び向かい合っているというこの現状は、何よりも奇妙だった。

ウオッカはトレセン学園を卒業した後に、バイクに対するその熱量から某有名バイク企業に入社したはずだ。そして、そこの実業団で代表選手としても活躍している……という話を、風のうわさで聞いていた。俺がそのことを尋ねると、

「あー……」

とウオッカは気まずそうに椅子の背もたれに体を預けた。

「辞めたんだよ、俺。入社して、多分一年半だったんだけどさ」

「そりゃまた……どうして」

「営業部に配属されたんだけど、全ッ然成績が出なくってさ。なんだかこう、どんなモノでもうまく伝えるってのができなかったんだよ。

そりゃあ、俺はバイク好きだぜ？　でも、車種によって熱量の度合いっつーか、お客への伝わり具合っつーか、

めちゃくちゃブレちまうんだよなー。
　で、向いてないなって思っちまったんだ」
「確かに、ウオッカは昔から自分の個性に突き抜けてたからな。クラシック期の有馬記念の後に、スピード勝負のマイル・中距離路線に方向転換して、結果的に大正解だったし」
「おうよ。やっぱ俺は昔から、好きなこととか、個性とか、そういうのにガッツリ偏ったことしかできねーんだよなー。
　優等生のスカーレットには笑われちまうぜ、きっと」
「いや、突き抜けてるのも十分カッコいいと思うぞ？　……そういえば、その後は何してるんだ？　今日も休暇か何かなんだろうけど」
「何か月か転職活動してみたんだけど、なーんか性に合わなくてさ。結果、やったことのないことに挑戦してみたくて、ウマチューブ始めたんだよ、俺。モトブログ動画ってやつさ」
「めちゃめちゃウオッカっぽい方向転換だ……」
「だろ？　でもこれが意外と人気出ちまってさー。確か、十五万人くらいチャンネル登録してくれてんだよな。で、今日も撮影中だったって訳」

「そうだったのか。邪魔してなかったらいいが」
「とんでもねーよ！　アンタこそ、何してたんだ？　トレセン辞めちまったのか？」
まさか、と俺は笑った。
「今はだいぶクセの強い子を担当してるんだけど、将来きっと強くなるって確信してる。
で、その子の次のレースがちょっと遅くて、十二月のホープフルステークスなんだよ。半年近くあるから、一週間の有休を貰って、実家に帰ってきてたんだ。もちろん、担当の子は臨時で別のトレーナーに見てもらってるけど」
「そういうことかー。ちなみに、今日はどこに行く予定だったんだ？」
「角島ってとこ。知ってる？」
そう言ったとき、ウオッカの耳がピクリと前を向いた。
「マジで？　俺も、今日は角島行くとこだったんだよ。今、九州から中国にかけての縦断企画やってたところでさ。そうだトレーナー、一緒に行かねーか？　これもなんかの縁だぜ」
「おいおいおい」
俺は慌てて手を振った。確かにウオッカと久しぶりに会えたのは嬉しいし、ツーリングできるならそれは尚更